

マザー・テレサのおねがい

ぶん こじまよしみ え さとうひろこ



マザー・テレサのおねがい

— ぶん こじまよしみ え ちとうひろこ



女子/竹口金



夜が ふけて
 きました。でも
 とても あつく、
 じつじつと、いまでも
 あせが ふきでて
 きます。



その そばで マザー・テレサは、
 こんやも また おてがみを 書いて
 いるのです。こんなにも おそくまで、
 いったい だれに おてがみを 書いて
 いるのでしょうか。

ここは、とおい
 南の 国、インドの
 コルカタと いう
 町に ある
 しゅうどろいんです。
 みんな よく
 おむって います。



こころの こもった おくりものを ありがどう。

スーザン、あなたは だいすきな チョコレートを がまんして、

その お金を おくって くれました。

かずひろと えり、あなたたちは、がっこうまでの 五キロの 道を、
でんしゃに のらないで、ためた お金を おくって くれました。

ゆきの 日は、さぞ たいへんだったでしょう。

アッカーさん、あなたは、十八かいめの 大しゅじゅつを うける
くるしみの なかで、わたしたちの ために いのって くださって います。

ワイリアムさん、ことしも、あたらしい ようぶくを かわないうで、

その お金を おくって くださいました。やさしい おくさまが、

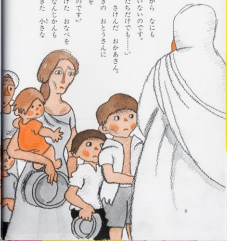
やぶれた よるい ようぶくをつくらって いる すがたが

日に うかびます。

「さみしい、みんなの
おくりものを、たいへん
よろこんで、います。」
しかし、みなさん、さみしい
人が、ほんとうに、うれしいのは、
たべものより、あたたかな
こころなのです。
どうか、この、人たちの
ことを、いつも
思いだして、ください。



「さみしいから、なにも
たべて、いないのです。
この、子たちだけでも……」
ひっしに、きけんだ、おかあさん。
「びょうきの、おとうさんに
たべものを
あげたいのです。」
こおれかけた、おなべを
もって、なんじかんも
歩いて、きた、小さな
男の子。





マザー・テレサは、小さなころの、なまえを

アグネスと、いいました。家は、スコピエと、いう町の

くすりやさんで、おとうさんも、おかさんも、

かみさまを、こころから、たいせつに、思っている

とても、よい、人たちでした。

アグネスが、いつも、ふしぎに、思っている、ことが、ありました。

「おかあさん、どうして、イエスキスは、なにも、きて、ないの？」

「かみさまなのに、わたしたちの、ためには、ますしく、なっ

てくださったのよ。アグネス、きるものが、ない、ますしい、人に、であつたら、

その、人に、なにが

きせて、あげなさい。

そう、すれは

イエスキスが、

およろこびに

なりますよ」

アグネスは、

はだか

きみし、そうな

イエスキスを

よろこばせようと

思いました。





じおんの ためでは なく、かみさまの ためには、いっしょを
ささげたい——。アグネスが そう 思ったのは 十二さいの ときでした。
ちよとど その ころ、インドから ひとりの しんおさまが かえって
いらして、とおい 雨の 国の お話を して、くださったのです。
「インドは とても あつい 国で、おおぜいの 人が、たべものも なく
びょうまで くるしんで います。そのうえ、かみさまが わたしたち
ひとり ひとりを たいせつに 思って いらっしやるよ という ことを
しらないのです。」

「インドへ 行って、かみさまの おこころを しらせたい。」
インドへの 思いは、アグネスの こころの なかで、しだいに 大きく
なってい いったのです。